

| | |
|------------------|---|
| Title | 佐藤栄作の台湾訪問と蒋介石の対応 |
| Sub Title | Eisaku Sato's Taiwan visit and Chiang Kai-shek's response |
| Author | 段, 瑞聡(Duan, Ruicong) |
| Publisher | 慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会 |
| Publication year | 2025 |
| Jtitle | 慶應義塾大学日吉紀要. 中国研究 (The Keio Hiyoshi review of Chinese studies). No.18 (2025.) ,p.107 (96)- 144 (59) |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | |
| Genre | Departmental Bulletin Paper |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12310306-20250331-0107 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

佐藤栄作の台湾訪問と蒋介石の対応

段 瑞 聡

一 問題意識

1967年9月7日から9日にかけて、佐藤栄作は日本の総理大臣として台湾を公式訪問した。それに先立ち、5月に中華民国政府（以下「国府」と略称）⁽¹⁾副総統兼行政院長の嚴家淦が訪米の途中で東京に立ち寄り、佐藤首相と会談している。また、同年11月27日から12月2日まで、国府国防部長の蔣経国が日本政府の公賓として訪日し、同年12月には元総理大臣の岸信介も台湾を訪問した。このように、1967年の日本と国府の外交関係が非常に密接であったことがうかがえる。

これまでの研究では、佐藤の台湾訪問についての分析⁽²⁾が多かったが、蔣経国の日本訪問⁽³⁾や岸信介の1967年の台湾訪問⁽⁴⁾に関しては、ほとんど研究が行われていない。また、佐藤の台湾訪問に関しては、日本側の視点から沖縄返還や対台湾円借款⁽⁵⁾に焦点を当てた議論が中心であり、その全体像は未解明のままである。近年、日本外務省外交史料館や台湾中央研究院近代史研究所档案館、国史館の档案資料、および「蒋介石日記」「蔣経国日記」などが公開されている。本稿では、それらの一次史料を用い、佐藤と岸の台湾訪問、および蔣経国の日本訪問の目的や意義、さらに蒋介石や国府の対応を考察し、蒋介石の対日認識を明らかにする。このような分析は、1960年代の日本と台湾の関係を理解するだけでなく、日中、米中、中ソ、そして兩岸関係の理解を深める上でも重要であると考えられる。

佐藤栄作と蒋介石の会談記録を読むと、その議題が沖縄返還にとどまらず、多岐にわたることが分かる。具体的には、蒋介石のアメリカの対中政策への批判、中国共産党政権（以下「中共政権」と略称）の核兵器開発や文化大革命、中ソ関係への認識、日華協力による原子力の平和利用、日ソ関係、ベトナム戦争、さらには大陸反攻への期待などが含まれている。

会談記録には建前が含まれる可能性があるが、「蒋介石日記」や「蔣経国日記」はより本音が反映されていると考えられる。公式文書と日記を比較することで、蒋介石と蔣経国の対日認識がより具体的に明らかになるだろう。

日本留学経験をもつ蒋介石にとって、明治維新を経て近代国家になった日本は学ぶべき手本であった。日中戦争を自ら経験しながらも、終戦時に蒋介石が「以德報怨」という寛大な方針を採用したことは、日本における「蒋介石恩義論」⁽⁶⁾の背景となっている。冷戦構造の中で、大陸反攻を実現するため、蒋介石はアメリカや日本を含む自由主義陣営の一員となることを目指した。しかし、彼はアメリカに対して批判的でもあり、その背景には一貫して黄白人種意識やアジア意識、反帝国主義的な意識があった。これらの意識は蒋介石の対日認識にも影響を及ぼしている。1967年には、蒋介石は日本に関する書籍を精読し、同年11月に開催された中国国民党第9期中央委員会第5回全体会議（以下、「国民党9期5中全会」）での訓辞において、明治維新と戊戌変法を比較し、再び日本に学ぶことを唱えた。この訓辞からも蒋介石の対日認識がうかがえる。

二 佐藤栄作の台湾訪問の目的

（一）先行研究

佐藤栄作の台湾訪問の目的について、彼のブレーンである衛藤藩吉は次のように分析している。「9月の台湾訪問は、中国大陸と台湾と

の実情を知るため、栄作はどうしても行きたかった。それに加えて、沖縄は元来、明治時代にその帰属をめぐる日清間に激しい論争があった地域である。中国政府はいまだかつて、沖縄の日本帰属を正式に認めていない。そして台湾には、沖縄独立運動の活動家たちが蟠居^{ばんきょ}していた。栄作としては、沖縄返還のためには、台湾の国民政府が返還を黙認するか、あるいは少なくとも言葉だけの抗議にとどめておいてもらわないと困る。そのためには、そのほかの局面での日台友好を大いに高めることが必要であった。栄作の台湾訪問はまさに、沖縄返還交渉への暗黙の布石をなすものであった⁽⁷⁾。

また、沖縄返還交渉において佐藤の密使として重要な役割を果たした若泉敬は、佐藤の台湾訪問について次のように述べている。「アジア、大洋州での友好、平和、繁栄への途を探求し、アジアの一員として積極的な役割を果たす日本外交の姿勢を明確にするとともに、それを踏まえて11月に訪米し、そこでこのアジア・大洋州外交の成果を結実させるという強い戦略的配慮が働いていた」のである⁽⁸⁾。さらに若泉は、「中国大陸の動向がアジア情勢のなかで大きな比重を占める以上、日米首脳会談をひかえて、台湾訪問はそれなりの重要性をもっていった。そのうえ、中華民国は対日平和条約第3条に密接に関わっており、沖縄の“両属体制”に関する日中両国の歴史的な諸問題に終止符を打っておく」と指摘している⁽⁹⁾。

一方、池田直隆は日本とアメリカ側の外交記録に基づき、佐藤の訪台における日華首脳会談の内容と訪台の政治的影響を分析し、「佐藤訪台が決して与野党の反佐藤勢力または報道関係者が批判するような『対米追随』外交でも、『中国敵視』外交でもなかった」と指摘している⁽¹⁰⁾。

また、井上正也は佐藤の訪台をめぐる政府内の摩擦（自民党議員と外務省の対立）および佐藤・蒋介石会談の詳細を分析し、訪台の目的は「米国に日本が地域的責任を担う覚悟を示し、同時に沖縄返還について国府の理解を得ること」であると指摘している⁽¹¹⁾。

さらに、神田豊隆も佐藤の訪台について、沖縄返還に対する台湾側の反対論を緩和する目的があったと指摘する一方、「この訪台は、表面的な印象ほど、日台関係の強化に繋がるようなものではなかった」と結論づけている⁽¹²⁾。

(二) 台湾単独訪問決定の経緯と目的

1964年8月、張群が来日した際、吉田茂は佐藤栄作の台湾訪問を提案した⁽¹³⁾。翌年8月には、沈昌煥外交部長が来日し、巖家淦副総統から佐藤宛の親書を手渡し、一日も早く台湾を訪問するよう求めた⁽¹⁴⁾。さらに、1966年5月31日に国府駐日大使魏道明が離任挨拶を行った際、佐藤に再び訪台を要請した。それに対し佐藤は、「私も是非一度お国を訪問し、蔣総統閣下にも過去のお礼（下線は引用者）を申し上げたり、また将来のことについても語り合いたいと思っております」と応じた⁽¹⁵⁾。

当初、佐藤栄作は東南アジア訪問の帰路に台湾に立ち寄る予定だった。しかし、これに対し国府側は不満を示し、岸信介や吉田茂の側近である衆議院議員の北澤直吉を通じて訪問の順序を見直すよう求めた⁽¹⁶⁾。この働きかけにより、訪台は単独で実現する形となった。外務省内では当初これに不満を抱いていたが、日本国内で「単独で実現すべき旨強く主張する向き」があったことが決定打となった⁽¹⁷⁾。特に岸信介をはじめとする親台湾派の影響が大きかったと考えられる。

1966年6月17日、国府駐日大使陳之邁は国府外交部宛の電報で、佐藤総理が中日両国の特別な友情を重視し、「わが政府の願望を尊重し」、同年9月7日から9日まで台湾を訪問することを決定したと報告した⁽¹⁸⁾。

では、なぜ国府は佐藤栄作の単独訪問にこれほどこだわったのだろうか。当時の国府の対日姿勢について、日本の外務省は次のように分析している。「国府は諸外国の動向中、米国に次いで、日本の動向を最も重視している。日本の実力に対する高い評価、日本の支持・協力

が国府の存立にとり、ほとんど決定的に重要であるとの認識等から国府は日本との親善・協力を強く要望している」⁽¹⁹⁾。この分析から、国府が日本との親善と協力を強く望んでいたことがうかがい知れる。

こうした背景から、佐藤栄作の台湾訪問には、沖縄返還交渉の布石や、11月のアメリカ訪問時の外交カードの準備といった戦略的な目的があったほか、終戦時の蒋介石の恩義への感謝も重要な要素であったと考えられる。

中島琢磨は、佐藤栄作が吉田茂の影響を受け、特に台湾を重視していたと指摘し、次のように述べている。「義理堅い佐藤は、かつて日本が敗戦したのち、蒋介石が日本占領に関して、日本を連合で占領する資格があるのは中国（ここでは中華民国）だけであるにもかかわらず、中国は占領を放棄しておりソ連に日本を占領する資格はないと反対したエピソードや、二百万人を超す日本人の中国からの早期帰国を指令したこと、および日本に対する賠償請求権を放棄したことを、のちのちまで忘れなかった」⁽²⁰⁾。

実際に、佐藤栄作は台湾到着の翌日である9月8日午前10時、忠烈祠を参拝して献花した。この行動から、彼が「過去」への感謝の意を示そうとする意図が見て取れる。また、1975年4月に蒋介石が死去した際、佐藤は「個人の資格」で葬儀に参列した⁽²¹⁾。

その後も、1985年の蒋介石生誕百周年を記念して岸信介や灘尾弘吉の主導で「蒋介石先生の遺徳を顕彰する会」が結成された。この会の主催により、1985年から1986年にかけて、東京、仙台、福岡、京都、奈良、名古屋、札幌、大阪、福島、滋賀などで「蒋介石先生の遺徳を偲ぶ夕べ」が開催された⁽²²⁾。

さらに、神奈川県桜木町の伊勢山皇大神宮や千葉県市川市の法華経寺、夷隅郡、東京八王子の雲龍寺などには「蔣公頌徳碑」が建立された⁽²³⁾。また、箱根の彫刻の森美術館には「中正堂」が、愛知県には中正神社が建設された。これらの出来事から、1980年代半ば頃まで日本では蒋介石恩義論が根強く存在していたことがうかがい知れる。

三 佐藤栄作・蒋介石会談と蔣の思惑

(一) 蒋介石と北澤直吉の会談

佐藤栄作の訪台を迎えるにあたり、蒋介石は綿密な準備を進めた。1967年8月20日、彼は日記に佐藤との会談内容について次の3点を記した。「①中共の核兵器が東アジアにもたらす脅威に対し、どのような対策を講じるべきか。②琉球問題について、アメリカは中共を消滅させるか、あるいは中共と妥協するまで決して放棄しないだろう。③国府の見解として、大陸を光復して初めて琉球問題が根本的に解決すると考えている。そのため、国府と日本の両国が協力してアメリカを説得し、大陸光復を支援してもらう必要がある。これこそが東アジアの安定にとって唯一の重要事項である」⁽²⁴⁾。

8月20日から21日にかけて、蒋介石は日月潭の涵碧楼で北澤直吉夫妻と3度にわたり会談した⁽²⁵⁾。蒋介石は北澤に対し、もし中共が核兵器を使用するならば、その最初の標的は日本になるだろうと明言した。彼は、台湾やそのほかのアジア諸国について、中共はすでにそれらを自分たちの領域とみなしているため、これらの地域は標的にはならないと考えていた。また、こうした考えを吉田茂に伝えるよう北澤に求め、その意図について「間接的に佐藤総理に警告することだ」と日記に明確に記している⁽²⁶⁾。

さらに、蒋介石は佐藤栄作との会談に際して、まずアメリカのアジア政策や中日関係について佐藤の意見を尋ね、自分から一方的に説明するべきではないと考えていた。佐藤との会談の目的について、彼は日記に次のように記している。「アメリカがわれわれの大陸反攻を黙認するよう、間接的に説得してもらうことが目的である。これは内政問題であり、アメリカが干渉するべきではない。また、アメリカに直接的な後方支援を求める意図もない」⁽²⁷⁾。

8月21日午前、蒋介石は北澤と別れる際に吉田茂への伝言を託した。

その内容は、「中日両国が東アジアおよび世界に対する政策において、共同で全体的な調整を行い、一致した行動を取るべきであり、その中心に大陸の中共打倒を据えるべきだ。そうすれば、将来的に琉球問題も日本の望む形で解決できるだろう」というものであった⁽²⁸⁾。このように、蒋介石は大陸光復を沖縄返還の前提条件と考えていたのである。

(二) 佐藤栄作と蒋介石との会談

1967年9月7日午後、佐藤栄作一行は台北松山空港に到着した。総統府秘書長の張群、行政院長の嚴家淦、外交部長魏道明らが盛大に歓迎した。その夜、嚴家淦が主催したレセプションが開かれ、宴会は夜11時まで続いた。佐藤は台湾に対して概ね好印象を抱いた⁽²⁹⁾。

翌8日午前10時、佐藤栄作は忠烈祠を参拝した後、蒋介石と1時間半にわたり会談を行った。同日夜8時から、蒋介石は歓迎レセプションを催し、佐藤と食事を共にしながら会談を行った。晩餐会終了後も両者の会談は続き、深夜12時まで及んだ⁽³⁰⁾。

ここでは、日本外務省外交史料館と台湾側が公開している記録を基に、両者の会談内容を見ていく。

1. アジア情勢と中共問題

会談において、蒋介石はまずアメリカの対中共政策を批判し、次のように指摘した。「アジアの問題は中共の問題にはかならない。(中略)われわれは中共問題の解決が難しくないと思っているが、アメリカは異なる観点をもっている。アメリカのアジア政策、とりわけ対中共政策は本末転倒である。20年来アジアの災いは、みなアメリカの誤った政策によるものである」。その上で、蒋介石は次のように強調した。「日本はアジアの支柱であり、アジアの安全のために主張する義務がある。中共の存在は中国に害をもたらすだけでなく、日本の脅威にもなる。それゆえ、日本には発言権がある」。また、佐藤が訪米する際には、アメリカの首脳にその事情を説明し、政策の是正を求める

よう要請した。

佐藤が具体的にアメリカのどの政策が間違っているのかと質したところ、蔣介石は以下の5点を挙げている。

(1) 核兵器の問題

1964年10月16日、中国は初の原子爆弾実験に成功した。当時アメリカは中共の原爆完成には10年かかると見込んでいた⁽³¹⁾。しかし、この出来事は蔣介石に大きな衝撃を与えた。彼は、アジアの多くの島国および台湾は、1、2発の原子爆弾だけで壊滅する可能性があるかと懸念していた。そのため蔣介石は、中共が原爆を完成させる前に、アメリカが大陸反攻を支持し、アジアの国々をして立ち上がらせ、中共と戦うべきであると主張した⁽³²⁾。

1967年6月17日に中国は初の水爆実験を成功させ、アジア初の核保有国となった。この状況に対して、蔣経国の日記には次のように記されている。「中共は再び核実験を行った。この狂気の敵が存亡の決断を迫られるとき、核兵器を使用して自らの危機を救おうとするだろう。その場合、国際的な大変動が発生する。しかし、われわれはあらゆる状況下で生き残る準備をする必要がある。これが最重要である」⁽³³⁾。

蔣介石は中共の核開発に対し危機感を募らせ、佐藤に対して次のように述べた。「中共が核実験を行った後、西側諸国は衝撃を受けたが、十分にその脅威を認識していなかった。しかし、アジア諸国はすでに不安を感じている。今後2、3年以内に中共の核兵器を消滅させなければ、人類に与える危害は計り知れない」。

晩餐会での会談中、佐藤は核兵器に関する日本の立場について次のように述べた。「日本では新憲法が施行されたため、軍備を行うことは禁止されている。それゆえ、基本的に日本は核拡散防止条約に賛成である。しかし、核実験には兵器製造以外に平和利用の途もある」。さらに佐藤は、「核所有国と非核所有国が一律に核開発を中止すれば、非核所有国の平和利用の途が閉ざされ、不公平であるため、日本としては賛同できない」と主張した。

これに対し、蒋介石は核の平和利用を研究し、不当な扱いを受ける場合は黙ってはいられないと応じた。また、彼は「日本の科学水準は高く、核の平和利用における研究でも優れた成果を上げているはずだ。中日両国は核の平和利用で協力を強化すべきだ」と提案した⁽³⁴⁾。佐藤はこの提案に賛同を示したが、深入りせず、話題を沖縄返還に移した。

最近の研究によると、1964年の中共の核実験を受けて、国府も核開発に着手した⁽³⁵⁾。1965年5月、蒋介石の主導で「中山科学研究院」準備処が設立され、国防部常務次長の唐君鉞が主任を務めた。そのためか、1967年11月に蔣経国が訪日した際、唐君鉞も随行した。

しかし、国府内部では核開発に反対する意見もあった。蔣経国の日記には次のように記されている。「国防部が提案した西ドイツとの共同による原子炉建設計画は、まず李国鼎の反対に遭遇した。さらに現在は陳雪屏が裏で活動し、各方面を結集してこの計画に反対している。聞くところによれば、彼はすでに呉大猷先生にも影響を与えているとのことだ。今日では外国事業を手がける者は多いが、国家の将来を真剣に考える者は少ない。そのため、わが国は建国以来すでに半世紀以上が経過しているにもかかわらず、イスラエルにすら及ばない状況だ」⁽³⁶⁾。

また、1967年8月15日の蔣経国の日記には次のように書かれている。「核エネルギーの研究開発計画は、2年の準備期間を経ている。国外からの阻害や技術面・人材面での困難を克服し、原子炉の購入と設置段階に進んでいる。しかし国内での政治的な反対に直面している。私は依然として最大限の忍耐力をもって、反対者たちを説得し、この計画を順調に進めるべく努めている。これにより、わが国の核エネルギー発展の基礎を築くことができるのだろう」⁽³⁷⁾。

しかし、アメリカから台湾に帰り、行政院国家科学委员会主任委員を務めた呉大猷や、中国系アメリカ人女性物理学者の呉健雄らの反対により、国府の核開発計画は一時中断を余儀なくされた⁽³⁸⁾。

(2) 中共内部の混乱

当時、中国は文化大革命の最中にあり、蔣介石は毎日のように日記に文革について書き記していた。彼は「中共政権は7億の人民とは全く別物である」とし、「われわれが大陸反攻を行えば、中共の軍隊は次々と寝返るだろう」と佐藤に主張し、大陸反攻への支持を求めた。

(3) 中ソ関係

蔣介石は、中ソ関係が極めて悪化しており、この時期に大陸反攻を行えば、中国南部への軍事行動に対しても、ソ連は介入しないだろうと予測していた。そのため、彼は今が中共政権を倒す絶好の機会だと強調した。

(4) 「二つの中国」問題

この問題に関して、蔣介石は次のように述べている。「アメリカは国府が大陸反攻すれば、アメリカも必ず巻き込まれると思い、それを避けるために、『二つの中国』という発想が出てきた。「一つの大陸と一つの台湾」をもって台湾を凍結し、一時の安逸に浸ることができると考えている。しかし、『二つの中国』という方法は、われわれは言うまでもなく、中共も受け入れられず、一種の幻想にすぎない。われわれの反攻は、アメリカの人的援助を必要としない。逆にもしアメリカが介入すれば、中共に口実を与えてしまい、われわれにとっては不利になる。つまり、中国のことは中国人自身によって解決できるのだ」。この発言から分かるように、蔣介石はあくまでも「一つの中国」にこだわっており、「二つの中国」構想に強い反対を示していた。

(5) ベトナム戦争

佐藤は自らの南ベトナム訪問について、決してベトナムに対して軍事支援を行うためではなく、むしろベトナム戦争を平和的に解決する方法を探るためであると説明した。それに対して、蔣介石は次のように述べた。「アメリカが対ベトナム政策を変えず、限定的戦争だけを繰り返すならば、絶対にベトナム戦争を解決することができない。これは明らかなことである。もし国府が大陸反攻し、とりわけ中国の

西南部を攻略し、北越と中共との交通路を断ち切り、補給を途絶させたら、北越はおのずと維持できなくなる。それから『三分軍事、七分政治』という原則を用いるならば、一日も早くベトナム戦争を解決できる。われわれが反攻しなければ、ベトナム戦争はなかなか解決し難い。もしベトナム戦争が延びたら、戦争はおのずと徐々に拡大し、東南アジア戦争にまで発展する可能性がある。それは決して世界の福ではない」。このように、蒋介石は大陸反攻がベトナム戦争を解決するための先決条件であると強調し、それを以って大陸反攻に対する日本、とりわけアメリカの支持を得ようとしていたのである。

大陸反攻を力説する蒋介石を目の前にして、佐藤栄作は直接反対意見を述べなかった。しかし、9月9日に帰国する際、佐藤は空港に向う車中では魏道明に、そして空港では張群に「くれぐれも慎重な上にも慎重である様にと蔣総統にお伝えください」と念を押した。佐藤は「台湾有事」を望んでいなかったのである。

2. 沖縄返還に対する蒋介石の複雑な思い

1967年7月24日付の外務省中国課による「総理と蔣総統との会談要領（案）」には沖縄問題は含まれていなかった⁽³⁹⁾。しかし、佐藤栄作は晩餐会の席上、この問題を取り上げた。両者のやり取りについては、国府側の記録のほうが詳細なため、ここでは国府側の記録を基に見ていく。

まず、佐藤は次のように述べた。「現在、日本国民と沖縄の90万の住民が一致して沖縄の日本復帰を強く求めている。私自身、沖縄の米軍基地が日本の安全だけでなく、アジア全体の防衛にも密接に関わっていることを十分に理解している。日本政府としては国民感情を無視することはできないが、同時に国家やアジアの安全も軽視することはできない。このような状況の中で、沖縄問題は現在の日本の悩みの一つであると言える。現在、日本は沖縄の米軍基地の機能を損なうことなく、適切な時期に返還させる方法を模索している。ただし、現在はベトナム戦争の最中であるため、沖縄の即時返還は現実的ではない。

しかし、将来を見据え、早期にアメリカ側と交渉を開始する意向である」。こう述べた後、佐藤は蒋介石に意見を求めた。

これに対し、蒋介石は次のように述べた。「現時点では、アメリカは安保条約に基づき日本を守ることができる。しかし、今後3～5年の間に中共が核兵器の開発に成功した場合、アメリカは自国の問題で手一杯になり、日本の安全が脅かされるだろう。この点については十分な注意が必要である」として、中共の核開発の危険性をまず強調した。

さらに、蒋介石は米軍にとって沖縄の重要性を指摘した。「琉球はアジアの安全にとって極めて重要である。アメリカが琉球の米軍基地を維持しなければならない理由は二つある。一つは、中共政権がアメリカの友好国ではなく、敵対者であること。もう一つは、もしアメリカが直ちに琉球を日本に返還した場合、中共は必ずやあらゆる手段を用いて琉球に浸透するだろう。同時に、中共は中国の合法政府を自任しており、琉球に対する領有権を主張し、予期せぬ問題を引き起こす可能性がある。私は日本が琉球返還を急ぐ必要はないと考える。アメリカは領土的野心をもっておらず、90万の琉球住民の声を無視することもできない。したがって、この問題は将来的に自然に解決するだろう」と述べた。このように、蒋介石は沖縄返還に明確に反対はしなかったが、積極的に支持するとも言わなかった。むしろ、直ちに返還されることは望まないというのが彼の本音だったと考えられる。

その背景には、大陸反攻という目標があった。蒋介石は次のように述べている。「私はかつて（午前中の会談、引用者注）アジアの問題はすなわち中共の問題であると述べた。琉球の帰属問題も例外ではない。われわれが大陸反攻を実現し、中共を排除し、アメリカが中国大陸における敵対勢力を取り除き、アジアの平和と安全を確立した後、琉球における軍事基地の必要性はなくなる。その時になれば、琉球問題は自然に解決されるだろう」として、大陸反攻の優先性を強調した。

晩餐会後、沖縄返還に対する明確な支持を得られなかった佐藤栄作

は、再度、沖縄返還を求める日本国民の高まる感情を強調した。しかし、蒋介石は「この件については急ぐ必要はない。理に適った事案はやがて合理的に解決される。ただの時間の問題にすぎない」と応じた。そのためか、佐藤栄作は日記において蒋介石との会談内容を記す際、沖縄返還に関する記述を一切避けている⁽⁴⁰⁾。

一方、蒋介石は佐藤との会談に満足している様子を日記に記している。9月9日には次のように書き残している。「昨晚の晩餐後、佐藤氏は再びソ連と琉球問題を提起し、われわれの意見は一致した。私は佐藤氏の政治的発言と行動が比較的現実的であると感じた。琉球について、日本への返還に反対する立場は取らず、われわれ国民党の政策に琉球を求める方針がないことを明言した。しかし、中共は琉球を中国に返還させようとするだけでなく、南北朝鮮も支配しようとしている。その野心は明白であり、私はそれを警告し、中共への警戒を促した。われわれが大陸を回復しなければ日本は存続できないという意図を間接的に示したところ、彼は非常に感動した様子だった」⁽⁴¹⁾。

9月10日午前、蒋介石は張群や魏道明らを招集し、佐藤の発言と態度について議論を行った。当日の日記で、蒋介石は次のように記している。「全員が佐藤を誠実であると認めた。私が述べたことに対し、彼は明確に返答し、アメリカ側に伝えると約束した。それは彼自身の意向から出たものであることが明らかである」⁽⁴²⁾。

蒋介石は佐藤との会談で、国民党が琉球を求めないと述べたものの、琉球に対する彼の認識には揺らぎがあった。

1967年1月7日、蒋介石は楊仲揆が著した「琉球丞相鄭廻伝」を読み、当日の日記に次のように書き記している。それを読んで「思いを馳せずにはいられなかった。琉球国がわが属領であり、日本の薩摩藩によって窃取された経緯を知った。また、若いころに琉球の歴史を詳しく研究できなかったことを悔やみ、第二次世界大戦末期に琉球を回復する好機を逃したことを残念に思う。今後、この国土を回復できることを願っている」⁽⁴³⁾。

1967年3月1日より、琉球の船舶が日本の国旗を掲揚することが認められた。また、4月1日からは、琉球住民が外国に渡航する際に所持するパスポートが那覇にある日本政府の南方事務所によって発行されることとなった⁽⁴⁴⁾。つまり、これにより琉球住民は日本国民として外国に渡航できるようになった。

これに対し、5月31日に開催された国民党第9期中央委員会常務委員会第297会議で、蒋介石は「琉球人が日本のパスポートを所持し、船舶が日本の国旗を掲揚することに関しては、アメリカを交渉相手とし、琉球の地位については将来に決定されるべきものであることを説明すべきだ」と指示した⁽⁴⁵⁾。つまり、蒋介石は、アメリカと日本が琉球に対して取ったこれらの措置は一時的な行政手段であり、琉球諸島の将来の地位には影響しないと考えていたのである。

この方針に基づき、6月28日、国府外交部政務次長の沈錡はアメリカ駐台湾大使館副館長のアーサー・W・ハメル（Arthur W. Hummel Jr., 中国名：恒安石）を外交部に招き、上述の内容を口頭声明として伝えた⁽⁴⁶⁾。同年7月には、蒋介石は琉球に領事館を設置することを検討していた⁽⁴⁷⁾。しかしながら、彼は「われわれの今日の対外政策は、大陸光復という一点に集中しており、それ以外はすべて副次的な問題である。琉球の責任はすべてアメリカに帰すべきである」との認識をもっていた⁽⁴⁸⁾。

1967年9月4日外務省中国課が作成した「琉球問題に関する中華民国政府の態度」において、国府の主張は下記4点に要約されている。「①琉球を赤化から護る。②琉球住民の希望を尊重し、自治の機会を与える。③琉球における日本の「潜在主権」保有に反対する。④琉球は歴史的には中国領であり、日本はこれを侵略・占領したものである」⁽⁴⁹⁾。

また、国府が琉球の日本領有に反対する理由について、同文書では次のように分析している。「①琉球が日本に復帰すると、琉球の左翼勢力の増大が予想され、至近距離にある台湾への影響をおそれている。

②琉球が将来日本に返還された場合、保守内閣の場合とはもかくとして、万一社会党政権にでもなれば、必ず米軍撤退を主張するであろう。これはアジアにおける自由陣営の防衛線を破壊することとなる。③本問題は、主として立法院内の CC 団系残党を主とする一部強硬派によって主張されているだけであり、立法委員の大部分も中国の帰属を主張するもののそれが実現せざることは十分承知している。(中略)④要するに、この問題は日華両国政府間に根本的な見解の相違があるので、日本側が潜在主権を主張すれば、中国としても遺憾ながら、これに反対せざるを得ない。さしあたり大した実益のあることではないから、むしろこのまま放置しておいてほしい」。そのような背景から、外務省中国課が作成した「総理と蔣総統との会談要領(案)」には沖縄問題が含まれなかったのだろう。ここからは沖縄返還をめぐる佐藤栄作と外務省との不一致が見て取れる。

四 蔣経国の訪日と岸信介の訪台

(一) 台湾口ビーの活動と外務省の対応

1967年11月27日から12月2日まで、国防部長の蔣経国は公賓として日本を公式訪問した。蔣経国の訪日のきっかけは、政治評論家の平沢和重の提案によるものである⁽⁵⁰⁾。1967年4月17日、平沢は台北で蔣経国と会見した。その際、平沢は私見として、「たとえば防衛長官が招待したい場合、貴部長はどうされるか」と打診したところ、蔣経国は「欣然受諾する」と述べたという。それを受けて、4月19日に蔣経国と平沢の会見をアレンジした行政院新聞局長の魏景蒙は、日本駐台湾大使館の原栄吉公使に対して蔣経国を日本に招待するよう提案したのである。

1967年5月2日、佐藤栄作は日記に次のように記している。「平沢和重君台湾より帰りて、蔣経国氏来日の意向あり、よって招待状を出すべしとの進言あり、近く嚴(家滄)副総統来日するから、その節口

頭で招待する様話すると引きうけた」⁽⁵¹⁾。5月7日、訪米途中で東京に立ち寄った嚴家淦副総統兼行政院長と会談する際、佐藤栄作は蔣経国を招待したい旨を伝えた⁽⁵²⁾。外務省も蔣経国を「次代の国府を背負う人物」と見ていた⁽⁵³⁾。

10月には、参議院議員の玉置和郎が外務省儀典長に対して、「蔣経国来日に際し、終戦時における蔣総統の態度にも鑑み、全国的な歓迎体制をとるべき」だと提案した⁽⁵⁴⁾。具体的には、①羽田空港での出迎え（規模は2000人）、②日比谷公会堂での集会開催と蔣経国による演説、③11月23日に日本大学講堂で「蔣総統に感謝する会」を開催し、1万5000人が参加すること、また三木武夫外務大臣、剣木亨弘文部大臣、重宗雄三参議院議長らが出席することが挙げられた⁽⁵⁵⁾。

玉置議員のそのような計画に対して、三木外務大臣は困惑し、日本駐台湾大使の島津久大も非常に不満を抱いた。10月30日、島津大使は外務大臣宛の電報で、「シヨウの招待は従来わが国に対し横を向いていたシヨオをしてわが国を正しく理解せしめる為」であり、「タマキ議員が何に感激しあるいは何をねらって一人かかる大さわぎを行わんとするか理解しがたい」と述べた。そこで、「今や同議員は暴走の危険もあり、この点本省において時き（ママ）を失せず適当に措置」を取るよう求めた⁽⁵⁶⁾。

11月21日には、島津大使が再び外務大臣宛に極秘電を送り、「シヨウ部長の招待の真のねらいが国府追随外交では無く、シヨウ部長に日本の実状を知らせて、日本の内政外交についての理解を深めることにある」と指摘し、「タマキ議員の暴走的な計画を公式日程から外す等に応分の努力を行って来た」と述べている⁽⁵⁷⁾。

では、なぜ島津大使が「タマキ議員の暴走」を懸念したのであるのか。そこには中共側への配慮があった。上記の極秘電で、島津大使は次のように述べている。「中共が本件訪問中ないしその後においてLT貿易協定交渉等につき何らかの報復措置をとることが危ぐされるので、（中略）サトウ総理の当国訪問に際し共同声明の内容や日程

(一例として総理夫人の反共ふ女(ママ)連合会への訪問を日程から削ったごとし)につき極めてしん重な態度でのぞみ、訪問の内容につき中共にいいがかりの余地を与えないように万全の努力を傾けたごとく今次訪問の内容についても同様な態度ないし努力が必要と思われる⁽⁵⁸⁾。このことから、当時日本政府の中共側に対する配慮が見て取れる。

では、なぜ玉置議員がこれほど蔣経国の日本訪問に熱心だったのであろうか。その最大の理由は、上述した「終戦時における蔣総統の態度」、すなわち蒋介石恩義論であったと考えられる。しかし、その背後にはもう一つの理由があった。それは、玉置議員と宗教団体「生長の家」との関係である。さらに言うならば、生長の家と台湾との関係も重要な要素の一つであった。

玉置和郎が生長の家に触れるきっかけは、自民党本部事務局で宗教団体を担当していた小泉光郎の紹介であった⁽⁵⁹⁾。1965年の参議院選挙で、当時生長の家政治連合会中央委員であった玉置は、85万票以上の得票で当選した。玉置の和歌山の地元票を除けば、ほとんどは生長の家の組織票と信徒の活動票であった⁽⁶⁰⁾。

一方、生長の家は戦前から台湾で布教活動を行っていた⁽⁶¹⁾。1949年5月、台湾で戒厳令が敷かれたため、生長の家の布教活動は制限された。それゆえ、一部の信徒は台湾での布教活動再開を求め、日本本部に対して台湾当局への働きかけを求めたのである。生長の家本部はこの要請に応じ、1967年10月に生長の家政治連合会会長の田中忠雄、幹事長の玉置和郎を台湾に派遣し、政府要人と交渉を行った⁽⁶²⁾。その際、生長の家の創始者・初代総裁の谷口雅春が、常日頃、終戦時の蒋介石の「以德報怨」政策に深く感謝していることを伝えたため、生長の家に対する台湾当局の態度が変わったと伝えられている。

実際、島津大使から三木外務大臣宛の極秘電報によれば、玉置は1967年9月30日から10月4日まで台湾に滞在し、生長の家関係者や、蔣経国の腹心で国民党中央委員会第一組主任の李煥と会っている⁽⁶³⁾。

このような背景から、11月23日に生長の家は両国の国技館で蔣経国歓迎会を開催し、重宗雄三参議院議長、玉置和郎参議院議員、鈕乃聖駐日公使など約1万5000人が出席した⁽⁶⁴⁾。玉置は歓迎会で演説を行い、終戦時の蒋介石の寛大政策について語った。具体的には、天皇制の存続、中国における日本軍と居留民の引き上げ、日本の分割占領の阻止である。戦後日本で言われている蒋介石恩義論には戦争賠償の放棄も含まれているが、玉置はなぜかそれには言及しなかった。

日本滞在中、東京をはじめ、京都、大阪などで生長の家の信徒総出で蔣経国を迎えた。その後、生長の家在台湾信徒の教化活動がかなりしやすくなり、出版物の発行も許可されるようになった⁽⁶⁵⁾。ここからは、玉置議員と宗教団体生長の家、そして台湾との関係が見て取れる。

(二)「蔣経国日記」から見る本音と建て前の葛藤

日本滞在中、蔣経国は昭和天皇に謁見し、佐藤栄作首相をはじめ、外務大臣の三木武夫、衆議院議長の石井光次郎、参議院議長の重宗雄三、防衛長官の増田甲子七と会談を行い、東京記者クラブなどで演説を行って、日本と国府との協力関係の重要性を訴えた⁽⁶⁶⁾。また、日産自動車工場、東芝工場、NHK放送センター、毎日新聞社を視察し、明治神宮、京都御所、二条城、龍安寺、大阪城を見学し、12月2日午後に帰国の途についた。

では、蔣経国自身は日本訪問をどのようにとらえていたのであろうか。1967年7月21日、蔣経国は日記に次のように記している。「日本政府は私を公式訪問に招待したが、これは日本側の政治的な目的によるものだ。私が訪問を決定したのも、自国の政治的目的があるからだ。しかし、決して私自身が望んでいたことではなく、精神的にも気持ちの上でも重い負担である」⁽⁶⁷⁾。

では、なぜ日本訪問は蔣経国にとって精神的負担となったのだろうか。その背景には、彼の生母・毛福梅の死がある。実は、1939年12月

に日本軍が蒋介石の故郷である奉化を爆撃した際、毛福梅は爆死してしまっただのである⁽⁶⁸⁾。それ以来、蔣経国は日本軍に対して深い恨みを抱いてきた⁽⁶⁹⁾。

9月8日の日記には、次のように記されている。「本日、佐藤（総理）は私を日本に招待することを発表した。父の命令に従い招待を受け入れることにしたが、自分がどれだけ国のために貢献できるかは分からない。今回の日本訪問の決定を通じて、国と国の関係が利益を唯一の要素として成り立っていることを改めて理解した。お互いが自国の利益のために利用し合っているに過ぎないのだ」⁽⁷⁰⁾。ここからも分かるように、蔣経国はリアリストであった。

とはいえ、蔣経国は日本訪問のためにさまざまな準備をしていた。10月14日の日記には、次のように書かれている。「来月に日本を訪問する予定だが、何らかの成果があるとは思えない。それでも、日本訪問の準備のために、日本の歴史、地理、文化、人物に関する多くの本を読み、多くの知識を得た。これは個人的な収穫だ」⁽⁷¹⁾。

12月4日、蔣経国は日記に次のように記している。「今朝3時頃に目が覚め、訪日の経過を思い返した。私は何者であり、外国政府からこのように丁重な接待を受けるに値する人物なのか。これはひとえに父のおかげだ。東京の防衛庁のビルに入る時、母が日本軍の手により惨死したことを思い出し、深い憎しみと悲しみが込み上げた。母の霊に対して恥じる思いがあったが、幸いにも私の行動はすべて国家の利益のためだ。その夜、宿で一人静かに座り、涙をこらえながら泣いた。一晩中眠れなかったが、翌日は予定通り訪問のプログラムをこなした」⁽⁷²⁾。

実は、日本訪問の出発前から、蔣経国の心は穏やかではなかった。11月25日、彼は日記に次のように記している。「岸信介の代表である木下（茂）と接見し、父親に会って仕事の報告をした。午後、心が憂鬱で、妻と一緒に家でじっと座っており、外には一歩も出なかった」⁽⁷³⁾。

11月26日、出発前日の日記には次のように書かれている。「安眠できなかつたため、朝の四時頃に起き、母の遺像の前にひざまずいて祈りを捧げ、謝罪した。心は一日中、不安でいっぱいであった」⁽⁷⁴⁾。

とはいえ、日本訪問は蔣経国にとって一定の収穫があった。12月2日、台湾に帰国する当日、彼は日記に次のように記している。「他国の進歩を見て、ただ羨ましがって驚嘆するだけでは臆病者である。自分が努力し、心を込めて取り組む限り、世の中に手遅れということは決してない。「遅すぎる」という考えを少しでも抱いてはならない。始めれば遅くはない。他人にできることは自分にもできるのだ」⁽⁷⁵⁾。東京、京都、大阪の発展を目の当たりにして、彼は羨ましく思い、驚嘆したのでらう。

12月5日、蔣経国は日記に次のように記している。「今回の訪日について、私個人の収穫としては、日本の地理、歴史、政治、経済、人物について新たな理解と認識を得たことだ。これは非常に大きな収穫である」⁽⁷⁶⁾。

訪日期間中、『中央日報』など台湾の新聞は、連日蔣経国の行動や日本側の歓迎ぶりについて報じた。12月3日の『中央日報』は「蔣部長の訪日成功を喜び迎える」という社説を掲載し、「日本朝野から異例のもてなしを受けた。(中略)蔣部長の今回の訪問の成功は、中日両国の外交関係の新たな境地を切り開いただけでなく、今後のアジアおよび世界情勢の発展にも影響を与えるだろう」と訪日の成果を讃えている⁽⁷⁷⁾。こうした一連の報道によって、台湾民衆の間で蔣経国の権威は高まったと考えられる。

(三) 蔣介石の認識と評価

1967年9月1日、蔣介石は蔣経国の訪日時に考慮すべき課題として、日記に次の5項目を記している⁽⁷⁸⁾。①琉球問題および日米中関係の研究。②電子光学および原子科学技術の協力に関する協定。③製鋼所、造船、車両製造、航空機製造業の契約。④経済、通商産業、治安警察、

軍事教育制度およびそれらの計画・組織、さらに職位分類に関する人事制度の研究。⑤国防組織および軍隊建設計画の監査、である。

また、10月4日に蒋介石は蔣経国の訪日時に考慮すべき点として、次のように書き記している。「①科学研究開発機構の設立手続きと方法。②経済研究開発の手続きと計画。③武器製造協力に関する協議。④行政管理における各種法規および各部門の法律顧問の任務。⑤予算編成の手続きおよびその予算管理の要領」である⁽⁷⁹⁾。

さらに、11月22日に蒋介石は蔣経国の訪日時の注意点についても日記に書いている。「①旧友との付き合いや故人の墓地。②宴会などの付き合いを減らす。③防護を重視する」⁽⁸⁰⁾。旧友に関して、蒋介石は日記の中で、藤山愛一郎、田中龍夫、洪沢栄一⁽⁸¹⁾、船田中、保利茂などの政治家や実業家の名前を挙げ、これらの人物には挨拶をしたり、お土産を贈ったりするべきだと記している⁽⁸²⁾。実際、11月30日午後、蔣経国は東京の青山霊園を訪れ、10月に亡くなった吉田茂の墓前に花輪を供え、礼拝した。同じ墓地内にある孫文・蒋介石の友人であった犬養毅元総理大臣や頭山満の墓にも礼拝をした⁽⁸³⁾。これにより、蒋介石父子が旧友や故人を大切にしていたことが示されている。

蒋介石は蔣経国の訪日を「第二次世界大戦と大陸陥落後、わが国の国際情勢における転換点」と位置づけ、佐藤栄作の対華外交方針の新たな段階を示すものであると評価している⁽⁸⁴⁾。

(四) 岸信介の訪台

蔣経国が台湾に帰国して一週間もたないうちの12月8日、岸信介が台湾を訪問した⁽⁸⁵⁾。蔣経国が訪日していた際、岸は東南アジアを訪れていたため、両者は東京で会うことができなかった。蔣経国は空港まで出迎え、翌日、岸を花蓮の中部横貫公路へ案内した。12月10日には、蒋介石が官邸で岸信介と会見し、日本政府が国府と協力して「共匪」を駆逐し、大陸を回復した後にこそ、日本が安定と繁栄を得られると強調した⁽⁸⁶⁾。9日夜には副総統の嚴家淦が、10日夜には蔣

介石自らが歓迎レセプションを催した。11日には、岸信介は中華学院院長の張其昀から名誉博士号を授与された。これにより、国府側が岸の訪問を非常に重視していたことが分かる。一方で、岸信介は蒋介石と張群に65万台湾ドル相当の錦鯉を贈り、錦鯉は12月10日には日航機で台北まで運ばれた⁽⁸⁷⁾。こうして1967年の日本と台湾のハイレベルな交流は、このような形で締めくくられた。

五 蒋介石の日本認識

では、この時期、蒋介石は日本に対してどのような認識をもっていたのだろうか。ここでは、1967年の「蒋介石日記」を基に、その認識について検討してみる。

まず指摘すべきは、蒋介石の日本に対する認識が、アメリカに対する認識とは対照的であった点である。

1967年3月17日、アメリカのジョンソン大統領が国府の大陸反攻に対して明確に反対の意を示した⁽⁸⁸⁾。それに対して、蒋介石は「青天の霹靂」のような衝撃を受け、1967年の「最も悲しい出来事」として位置づけた⁽⁸⁹⁾。

3月28日、蒋介石は日記に次のように書き記している。「アメリカのジョンソン大統領は私に圧力をかけ、侮辱してきただけでなく、私が提案した大陸反攻政策にも公然と反対した。これはもはや忍耐の限界に達したといえる。彼はすでにわが国の主権と領土を無視し、内政に干渉し、わが政府を台湾という孤島に縛りつけることで、二つの中国政策を推し進めている。(中略) これまでわれわれが忍耐してきたのは、彼が反攻を支援してくれるのではないかという希望があったからだ。しかし、その希望もすでに絶たれた。そうであれば、われわれがアメリカに何を期待する必要があるのだろうか⁽⁹⁰⁾。このように、蒋介石は、アメリカが大陸反攻に反対したのは、「二つの中国」をもくろんでいると認識していたのである。

4月中旬、蒋介石の持病が再発した。療養中、彼はアメリカに対する不満を日記に次のように記している。「病中、はなはだ『米帝（アメリカ帝国主義）』の手段の残酷さを感じる。およそ東亜の反共の指導者で独立した民族思想をもつ者に対しては、必ず害を加えたり、倒したりしないと気が済まない。その見た目は仁愛に満ちているように見えても、心の中では実際には残虐なことをしている。名目上は平等や民主主義を掲げているが、実際には奴隷のように強制する。彼らの凶暴さはほかのどの植民地帝国も及ばない。これに警戒しないでいられようか？」⁽⁹¹⁾。

では、蒋介石が言っている「東亜の反共の指導者」とは誰のことなのか。彼は日記に次のように記している。「韓国の李承晩とベトナムの吳廷琰（ゴ・ディン・ジエム）は共に反共愛国を掲げ、アジアにおいて最も積極的な反共の志士であった。世間では私を含めて最も反共の三大指導者と称されていた。今や李承晩と吳廷琰は、愛国心ゆえにアメリカの侮辱に耐えられず（抵抗をしていたが）、アメリカの陰謀により悲惨な死を遂げた。現在、私一人が奮闘を続けており、まだ彼らの計略に陥っていないが、さまざまな侮辱を受け、李承晩と吳廷琰の後を追う運命にある。アメリカの態度は明らかである。『共匪』が内部分裂し滅亡が間近に迫り、わが反攻復国の時期が近づいている今、帝国主義の陰険で残忍な手段に対しては嚴重に警戒し、さらにその政策に対しても慎重に対応すべきである」⁽⁹²⁾。ここからは、蒋介石がアメリカに対して抱いていた不信感が見て取れる。

蒋介石のアメリカに対する認識は、彼のアジア意識と密接に関連している。1967年9月8日、佐藤栄作総理招待晩餐会におけるスピーチの中で、蒋介石は次のように述べている。「アジアの問題の解決には、主にわれわれアジア人自身の努力が必要である。中日両国は共に東洋文化の支柱であり、声を合わせて呼応し、苦楽を共にする関係である。双方の理解と協力がアジアおよび世界全体に対して重要な影響を与えることができるだろう」⁽⁹³⁾。

そのような状況下で、蒋介石は日本を学ぶべき手本とし、多くの日本関係の書籍を読んでいた。ここでは1967年の日記に基づき、それらの書籍に対する蒋介石の評価を見てみよう⁽⁹⁴⁾。

(1) 陸奥宗光『蹇蹇録』(龔德柏訳)⁽⁹⁵⁾について

1967年8月25日、蒋介石は『蹇蹇録』を読み終え、日記に次のような感想を記している。「これは最も優れた政治外交史の教科書であり、わが政治、外交、軍事関係者は皆、これを研究すべきだ。なぜなら、一つは国の恥を思い起こさせるためであり、もう一つは外交の危険さや奥深さについての考えを深めるためでもある。経国に読ませてから、配布すべきだ」⁽⁹⁶⁾。当時、国府外交部北米司の科長であった錢復によれば、蒋介石は外交部の科長級以上の職員に対し、本書を精読するよう指示したという⁽⁹⁷⁾。

(2) 田村維則『勝海舟伝』⁽⁹⁸⁾について

1967年10月20日、蒋介石は日記に次のように書き記している。「今日、『勝海舟伝』を読み終えたが、得るところが非常に多かった。このことは、60年前に日本に滞在していた時に読んだこの伝記に対する考え方とは全く異なる。あの時、私は日本の歴史に対して偏見をもち、恨みの感情を抱いていたからである」⁽⁹⁹⁾。ここでの「恨み」とは日清戦争のことを指していると考えられる。

(3) ゴードン・W・ブランゲ (Gordon W. Prange) 『*Surprise attack Pearl harbor*——トラ・トラ・トラ——真珠湾奇襲秘話』(千早正隆訳、日本リーダーズダイジェスト社、1966年、中国語版は『虎虎虎——日本偷襲珍珠港秘辛』國防部聯合勤務總司令部編、1967年)について

蒋介石は「この本は私にとって最も有益であり、必読の書である」と評価している⁽¹⁰⁰⁾。

(4) 吉田茂『日本を決定した百年』(中国語版は『日本決定性的一个世紀(1867-1967年)』)について

蒋介石は「得るところが多かった」、「読み終えて有益だった」と高く評価している⁽¹⁰¹⁾。そのため、この本は11月に開かれた国民党9期

5 中全会において、蒋介石が指定した3冊の必読文献のうちの第1冊目となっており、その中国語版は会議出席者全員に配布された⁽¹⁰²⁾。

そのほかに、加瀬俊一『日本投降秘辛——日本外務省官員加瀬俊一回憶録』（英語版からの翻訳）、Witte『李鴻章遊俄紀事』（王光祈訳）、梁啓超『論李鴻章』、同『戊戌政変記』なども読んでいる。蒋介石はこれらの書籍を「すべて、私が80歳を迎えた後の建国事業に最も貢献するものだ」と評価している⁽¹⁰³⁾。

それらの書籍はいずれも、明治維新以降の日中関係に関連している。1967年9月8日、蒋介石が佐藤栄作との会談で次のように述べている。「私が若い頃、日本に留学し、維新精神の影響を深く受けた。そのおかげで、生涯にわたり物事の捉え方や行動の仕方に多大な恩恵を受けたと自覚している」⁽¹⁰⁴⁾。明治維新が蒋介石に与えた影響は非常に大きかったと考えられる。

1967年11月12日から23日にかけて、国民党9期5中全会並びに中央評議委員第4回会議が開かれた。そこで、蒋介石は「19世紀以来アジアの情勢とわれわれの復国・建国の要道」という訓辞を行った⁽¹⁰⁵⁾。訓辞の中で、蒋介石は明治維新の主な成果として以下の5点を挙げて

「①全国の263の藩をすべて廃止し、72の県に改めて、地方の封建勢力を根こそぎ取り除いたこと。②憲法を公布し、内閣政治と政党政治を実施し、文官制度を改革し、法律を制定し、健全な憲政を樹立したこと。③学制を改革し、新式の大学、中学校、小学校を設置し、科学を推進し、人材育成を奨励したこと。④立国の条件と必要に基づき、ヨーロッパの軍制度を模範とし、全国の徴兵を実施し、新制度の軍隊を設立したこと。⑤実業を発展させ、全国の人力、財力、物力を活用して、現代化した造船工業、兵工工業、化学工業、冶金工業などを創造し、鉄道、電気事業、海運事業を興したこと、である」⁽¹⁰⁶⁾。

蒋介石は「日本の維新運動は最初から科学に基づいて根本から始まった。政治、議会、財政、経済、軍事、教育などから、予算、収支、

会計、監査、そして会社組織に至るまで、すべて西洋の制度を模倣し、厳格に実施したため、30年以内に顕著な成果を収めた」と認識している⁽¹⁰⁷⁾。

ではなぜ日本の明治維新が成功できたのに、中国の戊戌変法が失敗したのであろうか。その原因について、蔣介石は次のような3点を挙げている⁽¹⁰⁸⁾。

第1に、「日本民族全体が純粋で一つである」。この点に関して、蔣介石は戴季陶の考えを取り上げている。戴季陶は、日本の維新が成功した原因を歴史上「民族統一を発展させる能力がすでに確立されていた」ことに帰結できると考えている。戴は「民族の統一した思想、統一した信仰、そして統一の力、これが日本維新成功の最大の要因である」と述べている。それに対して、中国では漢民族と満州族との対立があった。

第2に、「日本の維新自強は、政治、経済、財政、軍事、交通、そして科学の発展において、最初から包括的かつ体系的な計画があり、着実に一貫して実行されたことである。明治維新初期には、国内においては立国の精神と民族の伝統に基づき、立憲、人材の選抜、軍の建設、階級の廃止、産業の振興、学校の設立を同時に推進した。対外的には「和魂洋才」の原則を保持し、留学生を派遣して実用科学を学び、旧式の方法を完全に放棄して、工業生産技術を全面的に吸収した。そして列強と友好関係を築き、相互に通商し、外圧を減少させ、交渉を手段とし、民心を後ろ盾にして、数多くの困難な交渉を経て、30年以内に米国、イタリア、英国、ロシア、デンマーク、オランダ、スイスなど十数か国との不平等条約をすべて改正し、自由で平等な独立国家となった。これが徹底した学習と徹底した維新の精神によってもたらされた成果である」。

一方、蔣介石から見ると、当時中国側が提唱していた維新の道は、すべてが簡素化されたもので、表面上は改革のように見えても、実際には半ば新しく、半ば古い、いわゆる中途半端な改革であった。根本

的な計画もなく、一定の目標もなかった。科学的な知識ももたず、政治、経済、教育、軍事、外交が時代とともに進歩する必要があるという常識も認識していなかった。中国の戊戌変法の重大な欠陥は、科学の精神と科学的方法の重要性を認識していなかった点にある、と彼は指摘している。

第3に、「日本の維新自強は、すべてヨーロッパを手本とし、あるいは敵を師とすることもあったが、日本は常に自立して新たなものを求める精神を堅持し、外援に依存しなかった。(ただし、日本は第二次世界大戦中にドイツ、イタリアと「枢軸国」を結成し、物質面ではドイツに依存しなかったが、科学技術の面でドイツから多くの援助を受けた。戦後の日本の復興がこれほど速かったのは、戦時中にドイツから受けた科学技術の援助が大きな要因である。また、日本の繁栄が全面的に実現したのは、「共匪」による大陸での反乱、アメリカの全面的な支援と保護、そして朝鮮戦争やベトナム戦争の相次ぐ発生が関係していることも事実である)」。

それに対して、「清朝は独立自主の精神と意識を全くもっていなかった。外国の技術を学ぶときには自分たちの伝統的な長所を捨て、外国の観念を受け入れるときには自国の立国精神を忘れてしまい、何事にも外部に依存しようとした。外交に限っていえば、日本人がわれわれを揶揄したように、常に戦国策の手法を使っていた。今日この国と同盟し、明日あの国と同盟し、この国と同盟してあの国を制し、あの国と同盟してこの国を制するというように。もともと列強の間には争いがあり、連携の手段ももっていたが、そのような連携は自立できる方法に基づくものであり、他国を支配しつつも自分は支配されない連携でなければならなかった。しかし、清朝の外交政策には、自立自強の意図が全くなく、ただ一つの大国に依存してほかの大国に対抗するというものであった」。

日本の明治維新と中国の戊戌変法を比較する理由について、蒋介石は次のように説明している。「私が19世紀以降のアジアの状況を簡潔

に分析し、日本の維新と中国の変法の成功と失敗を比較した理由は、日本が富強になった理由と、われわれが後れを取っている理由を皆さんに理解してもらいたいからである。同時に、日本がわずか30年で現代化したのは、恥を知り、病（欠点、引用者注）を知り、行動し、新しいことに挑戦し、科学と産業の発展に尽力したからであり、王陽明の「知行合一」の哲学的思想を実践した結果であることを理解してもらいたい。同時に、日本は改革と新たな挑戦を続ける一方で、常にそのルーツを守り、民族の本質を失わずにいたのである」⁽¹⁰⁹⁾。

そのような背景から、蒋介石は下記のような10大革新政策を提起した⁽¹¹⁰⁾。

- ①党務の革新——率直な検討と具体的な提案。
- ②気質の変化——積極的で、能動的で、恥を知り、責任を負う。
- ③科学の発展——新たなものを求め、精進し、徹底し、明確にする。
- ④教育の改善——文化を発展させ、新しい知識を吸収し、最新の学術を研究し、最新の技能を学ぶ。
- ⑤経済の発展——重点を置き、実践的なものを求める。
- ⑥人事の整頓——苦勞を惜しまず、身をもって示し、人材を推薦する。
- ⑦行政の革新——責任制度を確立し、厳格な監督を行い、弾劾を恐れず、問題を恐れずに取り組む。
- ⑧業務方針——協力し、信頼し合い、迅速かつ簡潔に求め、時間を守り、秘密を守り、目標の達成期限を確定し、進捗を計画する。
- ⑨研究開発——科学的手法に重点を置き、本質と物事の先後を審議する。
- ⑩統計の重要性——すべての事柄、場所、財産、物質、時期、および人材の優劣、功績、過ちをすべて統計する必要がある。

蔣経国はこの訓辞が「革命行動の綱領であり、また復国のための教科書でもある」と高く評価している⁽¹¹¹⁾。しかし、蒋介石が提起した10大革新政策には立憲、議会への言及が欠如している。そこからは蔣

介石の政治指導の限界が見て取れる。

六 結語

本稿は1967年の佐藤栄作、岸信介の台湾訪問、蔣経国の日本訪問および蒋介石の日本認識について検討した。そこからは、冷戦構造の中における日米中関係と日中台関係の重層性がうかがえる。大陸反攻を夢見る蒋介石に対して、アメリカ政府は一貫して反対してきた。それに対し、蒋介石はアメリカが「二つの中国」を目論んでいると認識し、アメリカの対中政策に不満を抱いていた。

佐藤栄作の台湾訪問の目的には、沖縄返還交渉の布石や訪米に向けた情報収集に加え、終戦時に蒋介石が打ち出した「以德報怨」政策への感謝も含まれていた。佐藤が望んだ沖縄返還について、蒋介石は反対こそしなかったものの、大陸反攻が最優先事項であることを強調した。琉球の帰属に関して、蒋介石の考えには揺らぎが見られた。しかし、核兵器を保有する中共政権を前にして、蒋介石は琉球の帰属についてアメリカに委ねるしかないと認識していた。彼にとって、大陸反攻は最も重要な課題であった。

佐藤栄作の訪台と蔣経国の訪日にあたり、外務省と親台湾派議員の間で対立があった。吉田茂と岸信介はライバル関係にあったが、岸信介の弟である佐藤栄作は吉田茂の最も信頼された弟子であった。対台湾に関しては、この三者には共通するものがあつた。その一つは蒋介石恩義論者であり、もう一つは三者とも反共産主義者であったことである。北澤直吉や玉置和郎などの親台湾派議員は、台湾、特に蒋介石と蔣経国親子との関係構築において重要な役割を果たした。玉置議員の背後に控える宗教団体「生長の家」の存在は、この時期における日本と台湾の複雑な関係を象徴していた。

一方、蒋介石側も日本の政界に積極的に介入していた。「蒋介石日記」にはそれを示す興味深い記述がある。1967年1月5日、蒋介石は

日記に次のように記している。「午前中、総統府に入り、日本の選挙支援対象を決定した」⁽¹¹²⁾。同年1月29日、日本では第31回衆議院議員選挙が行われた。この日記に記されている「選挙支援対象」とは、明らかに衆議院選挙候補者を指すと考えられる。しかし、具体的にどのような人物に、どのような形で支援を行ったのかについては記述が見当たらない。今後、この問題をさらに解明することで、蒋介石と台湾ロビーとの関係がより明らかになると考えられる。

蒋介石は明治維新を高く評価し、日本を学ぶ手本とした。しかし、蔣経国の対日認識は複雑であった。母親の死が彼にとってまさに「痛恨の極み」であった。とはいえ、国全体の利益を考慮し、彼は日本訪問を決行した。そこからは彼のリアリストとしての側面がうかがえる。

蒋介石の日本に対する認識は、アメリカに対する認識とは対照的であった。その違いは、彼のもつ黄白人種意識、反帝国主義意識、さらにはアジア意識と密接に関連している。1967年12月23日、蒋介石は日記に次のように記している。「数年来、アジアとヨーロッパの境界線について頻繁に考えてきた。南側にはトルコのダーダネルス海峡が境界となっているが、北側の境界は明確に定まっていない。経兒（蔣経国、引用者注）から聞いた話によると、彼が以前ウラル山脈で『欧亚分界』と明記された境界碑を目にしたという。私の考えでは、ヨーロッパとアジアの分界はウラル山脈の稜線をもって分けるべきであり、その稜線の東側がアジアとなるべきだ。また、ロシアの白人は稜線の西側に移住すべきであり、そうすればアジアは真に黄色人種のアジアとなり、永久の平和を確保することができる。さもなければ、人種間の戦争によってこの世界最大の問題を解決し、永久平和の基礎を築くしかない。そして、それを実現するためには、われわれ中華民族が世界最大の人口を有する国として、リーダーシップの責任を果たすべきなのだ」⁽¹¹³⁾。ここからは蒋介石の黄白人種意識とアジア意識をうかがうことができる。

蒋介石がこれほど大陸反攻にこだわったのは、「一つの中国」を堅

持するためだけではなく、彼のアジア意識とも密接に関係しているからである。1967年2月22日、蒋介石は日記に次のように記している。「北伐の成功は国民の劣等感を打ち破り、対日抗戦の勝利はアジア人の劣等感を打ち破った。今後の反共復国の戦いは、西洋人がわが国とアジア民族に対してもっている軽蔑や優越感を打破することになるだろう。私はすでに前の二つの観念を打破したのだから、この最後の旧観念を打破し、世界に新たな記録を作り出すことができるのではなかろうか」⁽¹¹⁴⁾。蒋介石自身がこれを「戯言」としているが、これこそ彼の本音だったのかもしれない。

[付記] 本稿は、2024年6月15日に神奈川大学で開催されたアジア政経学会2024年度春季大会での報告を基に執筆されたものである。司会者の李鋼哲先生、討論者の深町英夫先生、武藤秀太郎先生、そして参加者の皆様から貴重なご意見を賜ったことに、深く感謝申し上げたい。なお、本稿完成後、2024年12月16日に早稲田大学で開催された「国際シンポジウム 蒋介石・蔣経国日記からみた中国近現代史と日中関係」でも報告した。主催者の劉傑先生をはじめ、早稲田大学先端社会科学研究所、浙江大学 蒋介石と近代中国研究センター、早稲田大学東アジア国際関係研究所および関係者の皆様にも感謝申し上げたい。また、貴重な資料を提供してくださった方々にも、心より御礼申し上げたい。

注

- (1) 1949年10月1日に中華人民共和国が成立し、同年12月には蒋介石率いる中国国民党政権が台湾へ敗走した。中国共産党政権は、1949年12月以降の国民党政権を承認せず、「台湾当局」や「国民党政権」などと呼称している。一方、国民党政権は公式に「中華民国政府」と称している。本稿では便宜上、これを「国府」と表記する。
- (2) 佐藤栄作の台湾訪問について分析や言及がなされているものは、以下の通りである。衛藤藩吉『佐藤栄作』（衛藤藩吉著作集第10巻）、東方書店、2003年（初出は時事通信社、1987年）。若泉敬『他策ナカリシヲ信ゼムト欲ス——核密約の真実』新装版、文藝春秋、2009年（初版は、1994年）。池田直隆著『日米関係と「二つの中国」』木

鐸社、2004年。井上正也『日中国交正常化の政治史』名古屋大学出版会、2010年、367-375頁。石井明「中国の琉球・沖縄政策——琉球・沖縄の帰属問題を中心に」『境界研究』第1号、2010年10月、89-91頁。神田豊隆『冷戦構造の変容と日本の対中外交——二つの秩序観1960-1972』岩波書店、2012年、261-262頁。丹羽文生『「日中問題」という「国内問題」——戦後日本外交と中国・台湾』一藝社、2018年、71-75頁。成田千尋『沖縄返還と東アジア冷戦体制——琉球／沖縄の帰属・基地問題の変容』、人文書院、2020年、165-168頁。同『世界史のなかの沖縄返還』吉川弘文館、2024年、79-81頁。

- (3) 蔣経国の日本訪問に言及しているのは、丹羽文生、前掲書のほか、下記のものがある。小谷豪治郎『蔣経国伝——現代中国八十年史の証言』プレジデント社、1990年、256-259頁、川島真・清水麗・松田康博・楊永明著『日台関係史1945-2020』（増補版、東京大学出版会、2020年、86-87頁。
- (4) 1957年6月に岸信介は、東南アジア歴訪の最後の訪問地として台湾を訪れた。それについては、下記の研究がある。前田直樹「日本の1950年代後半台湾政策と台湾海峡の現状固定化——岸首相訪台をめぐって」『広島法学』42巻2号、2018年10月、65-81頁。丹羽文生「岸信介と蔣介石——蜜月関係の実相」『拓殖大学台湾研究』第3号、2019年3月、1-25頁。
- (5) 許珩『戦後日華経済外交史1950-1978』東京大学出版会、2019年、第4章参照。
- (6) 「蔣介石恩義論」とは主に下記4つのことが含まれている。天皇制の存続、終戦時中国にいた日本軍と居留民の引き揚げ、日本の分割占領の阻止、戦争賠償の放棄である。賀屋興宣『戦前・戦後・八十年』浪曼、1974年、345-346頁。なお、蔣介石恩義論に関する最近の研究として、深申徹『戦後台湾における対日関係の公的記憶1945-1970s』国際書院、2019年、「序論」参照。
- (7) 前掲、衛藤藩吉『佐藤栄作』、176頁。
- (8) 前掲、若泉敬『他策ナカリシヲ信ゼムト欲ス——核密約の真実』新装版、54頁。
- (9) 同上、55頁。
- (10) 前掲、池田直隆著『日米関係と「二つの中国」』、193-201頁。
- (11) 前掲、井上正也『日中国交正常化の政治史』、375頁。

- (12) 前掲、神田豊隆『冷戦構造の変容と日本の対中外交——二つの秩序観1960-1972』、261頁。
- (13) 1964年8月16日に張群、岸信介、佐藤栄作などが吉田茂の大磯の自宅で昼食をとった。伊藤隆監修『佐藤栄作日記』第2巻、朝日新聞社、1998年、167頁。前掲、井上正也『日中国交正常化の政治史』、371頁。
- (14) 「中華民国政府の佐藤総理大臣訪台招請の経緯」（1966年12月2日）『佐藤総理中華民国訪問関係（1967.9）』第1巻、外務省外交史料館、分類番号：A'1.5.1.15。
- (15) 同上。
- (16) 前掲、井上正也『日中国交正常化の政治史』、370-373頁。
- (17) 「佐藤総理の中華民国訪問について」（1967年6月21日）『佐藤総理中華民国訪問関係（1967.9）』第1巻、外務省外交史料館、分類番号：A'1.5.1.15。
- (18) 「陳之邁呈外交部長電」（1967年6月17日）『日本首相佐藤栄作訪華』外交部档案、中央研究院近代史研究所档案館、档号：012.22 / 0080。
- (19) 「台湾の政治情勢（未定稿）」（1967年8月）『佐藤総理中華民国訪問関係（1967.9）』第1巻、外務省外交史料館、分類番号：A'1.5.1.15。この文献は、マイクロフィルムのほうに収録されている。
- (20) 中島琢磨「佐藤栄作——ナショナル・プライドと外交選択」、増田弘編著『戦後日本首相の外交思想——吉田茂から小泉純一郎まで』ミネルヴァ書房、2016年、181頁。
- (21) 池井優「弔問外交の研究——蒋介石総統の死去と日本の対応」『法学研究』第61巻第5号、1988年5月、117-136頁。
- (22) 馬紀壯編纂『仰之弥高 蒋介石先生の遺徳を偲ぶ』亜東関係協会東京弁事処、1987年参照。
- (23) 神奈川県桜木町の伊勢山皇大神宮にあった「蔣公頌徳碑」は、2022年10月に横浜中華学院に移築されている。
- (24) 「蒋介石日記」、1967年8月20日。本稿で引用する「蒋介石日記」はすべてアメリカ・スタンフォード大学フーパー研究所が所蔵するものである。
- (25) 「蔣中正接見日本衆議員北澤直吉夫婦談話記録」（一、二、三）（1967年8月20、21日）、「張群先生文巻—総統接見日人談話案（一）」『蔣中正総統文物』国史館、典藏号：002-110400-00003-011、002-110400-00003-012、002-110400-00003-013。「蒋介石日記」、1967年

- 8月20-22日。
- (26) 「蒋介石日記」、1967年8月22日。
 - (27) 「蒋介石日記」、1967年8月22日。
 - (28) 「蒋介石日記」、1967年8月21日。
 - (29) 伊藤隆監修『佐藤栄作日記』第3巻、朝日新聞社、1998年、129-130頁、1967年9月7日。
 - (30) 日本側記録、前掲、伊藤隆監修『佐藤栄作日記』第3巻、130頁。
「佐藤・蔣会談議事録」（1967年9月12日）『佐藤総理中華民国訪問関係（1967.9）』第2巻、外務省外交史料館、分類番号：A'1.5.1.15。
国府側記録、「総統接見日本内閣総理大臣佐藤栄作談話記録」「外交—蔣中正接見日方代表談話記録（三）」『蔣経国総統文物』国史館、
典蔵号：005-010205-00113-001（1967年9月8日午前、第1回会談）、
005-010205-00113-002（9月8日晚餐後、第2回会談）。
 - (31) 「蒋介石日記」、1964年10月24日。
 - (32) 「蒋介石日記」、1964年10月17日。
 - (33) 「蔣経国日記」、1967年6月20日。本稿で引用する「蔣経国日記」はすべてアメリカ・スタンフォード大学フーバー研究所が所蔵するものである。
 - (34) 「日本有無為和平利用原子能而進行原子試爆之可能？」『日本首相佐藤栄作訪華』、外交部档案、中央研究院近代史研究所档案館、档号：012.22/0078。
 - (35) 林孝庭『台海・冷戦・蒋介石——解密档案中消失的台湾史1949-1988』聯経出版事業股份有限公司、2015年、第10章「台湾研發核武秘辛」。山口直樹「台湾における原爆開発の試みとその挫折——蒋介石親子の夢と核科学者たち」『葦牙』第44号、2018年10月、81-92頁。
 - (36) 「蔣経国日記」、1967年6月22日。
 - (37) 「蔣経国日記」、1967年8月15日。
 - (38) 前掲、林孝庭『台海・冷戦・蒋介石——解密档案中消失的台湾史1949-1988』、326頁。
 - (39) 「総理と蔣総統との会談要領（案）」（1967年7月24日）『佐藤総理中華民国訪問関係（1967.9）』第2巻、外務省外交史料館、分類番号：A'1.5.1.15。
 - (40) 前掲、『佐藤栄作日記』第3巻、1967年9月8日、9日参照。
 - (41) 「蒋介石日記」、1967年9月9日。

- (42) 「蒋介石日記」、1967年9月10日。
- (43) 「蒋介石日記」、1967年1月7日。なお、1943年カイロ会談における戦後琉球の帰属に対する蒋介石の認識については、下記拙稿参照。
段瑞聡『蒋介石の戦時外交と戦後構想1941-1971』慶應義塾大学出版会、2021年、第3章。
- (44) 河野康子「沖縄返還と地域的役割分担論」(二)『法学志林』第106巻第3号、2009年2月、100-104頁。
- (45) 呂芳上主編『蔣中正先生年譜長編』第12冊、国史館、国立中正記念堂管理处、財団法人中正文教基金会、2015年、415頁。
- (46) 「行政院第1029次會議議事録」(1967年7月27日)『行政院會議議事録 臺第277冊1028-1030』、『行政院』、国史館、典藏号：014-000205-00304-002。
- (47) 「蒋介石日記」、1967年7月1日。
- (48) 「蒋介石日記」、1967年6月3日「上星期反省録」。
- (49) 「琉球問題に関する中華民国政府の態度」(1967年9月4日)『佐藤総理中華民国訪問関係 (1967.9) 準備資料』外務省外交史料館、分類番号：A'1.5.1.15-2。この文献は、マイクロフィルムのほうに収録されている。
- (50) 「中華民国蔣経国国防部長の招待についての説明書」(1967年6月23日)『中華民国要人本邦訪問関係 蔣経国国防部長関係』外務省外交史料館、分類番号：A'1.6.1.6-2。
- (51) 前掲、『佐藤栄作日記』第3巻、69頁。
- (52) 「中華民国蔣経国国防部長の招待についての説明書」(1967年6月23日)『中華民国要人本邦訪問関係 蔣経国国防部長関係』外務省外交史料館、分類番号：A'1.6.1.6-2。
- (53) 「蔣経国の略歴と人柄」(1967年11月1日)『中華民国要人本邦訪問関係 蔣経国国防部長関係』外務省外交史料館、分類番号：A'1.6.1.6-2。
- (54) 「三木大臣発島津大使宛電」(1967年10月16日)『中華民国要人本邦訪問関係 蔣経国国防部長関係』外務省外交史料館、分類番号：A'1.6.1.6-2。
- (55) 「蔣経国歓迎振りに関する玉置参議院議員談」(1967年10月18日)『中華民国要人本邦訪問関係 蔣経国国防部長関係』外務省外交史料館、分類番号：A'1.6.1.6-2。
- (56) 「シヨウケイコク訪日」(1967年10月30日)「三木武夫関係資料」

No.2944、近現代史資料データベース。

- (57) 「島津大使発外務大臣宛電」(1967年11月21日)『中華民國要人本邦訪問関係 蔣経国国防部長関係』外務省外交史料館、分類番号：A'1.6.1.6-2。
- (58) 同上。
- (59) 玉置和郎記録集編纂委員会編『政党政治家 玉置和郎』学習研究社、1988年、30頁。
- (60) 生長の家本部編纂『生長の家四十年史』日本教文社、1969年、496頁。
- (61) 寺田喜朗『旧植民地における日系新宗教の受容——台湾生長の家のモノグラフ』ハーベスト社、2009年参照。
- (62) 同上、161-162頁。前掲、生長の家本部編纂『生長の家四十年史』、505-506頁。
- (63) 「島津大使発外務大臣宛電」(1967年10月18日)『中華民國要人本邦訪問関係 蔣経国国防部長関係』外務省外交史料館、分類番号：A'1.6.1.6-2。
- (64) 「東京万余民衆集会 歓迎蔣部長訪日本」『中央日報』、1967年11月25日第一版。
- (65) 前掲、生長の家本部編纂『生長の家四十年史』506頁。
- (66) 蔣経国訪日時の一連の談話は、蔣経国先生全集編輯委員会『蔣経国先生全集』第13冊、行政院新聞局、1991年、209-245頁所収。「部長與日本佐藤首相談話記録」(1967年11月27日)「蔣経国訪日(三)」『蔣経国總統文物』国史館蔵、典藏号：005-010100-00014-010。
- (67) 「蔣経国日記」、1967年7月21日。
- (68) 「蔣介石日記」、1939年12月13日。
- (69) 蔣経国は「以血洗血」と刻む石碑を建立し、今でも寧波奉化にある彼の生家に展示されている。
- (70) 「蔣経国日記」、1967年9月8日。
- (71) 「蔣経国日記」、1967年10月14日。
- (72) 「蔣経国日記」、1967年12月4日。
- (73) 「蔣経国日記」、1967年11月25日。
- (74) 「蔣経国日記」、1967年11月26日。
- (75) 「蔣経国日記」、1967年12月2日。
- (76) 「蔣経国日記」、1967年12月5日。
- (77) 「歓迎蔣部長訪日成功帰来」『中央日報』、1967年12月3日第二版、「社論」。

- (78) 「蒋介石日記」、1967年9月1日。
- (79) 「蒋介石日記」、1967年10月4日。
- (80) 「蒋介石日記」、1967年11月22日。
- (81) 洪沢栄一は1931年に死去したため、ここではその親族を指していると考えられる。
- (82) 「蒋介石日記」、1967年11月25日。なお、蔣経国が東京で誰に会うべきかについては、岸信介と賀屋興宣が提案している。「最近日本政情及部長訪日有関問題」「蔣経国訪日（一）」、『蔣経国総統文物』国史館、典藏号：005-010100-00012-017。田中龍夫は元総理大臣の田中義一の長男で、佐藤栄作訪台時、田中も同行した。
- (83) 「蔣経国国防部長の日本訪問」（1967年12月19日）。『中華民国要人本邦訪問関係 蔣経国国防部長関係』外務省外交史料館、分類番号：A'1.6.1.6-2。なお、2011年に吉田茂のお墓は、青山霊園から横浜・久保山墓地に改葬された。
- (84) 「蒋介石日記」、1967年11月30日、1967年「本年総反省録」。
- (85) 「日本前首相岸信介訪華案」「日本政界人士訪華（三）」、『外交部』国史館、典藏号：020-100900-0030。
- (86) 「蒋介石日記」、1967年12月10日。
- (87) 「日本前首相岸信介訪華案」「日本政界人士訪華（三）」、『外交部』国史館、典藏号：020-100900-0030。錦鯉の内訳は以下の通りである。金色と紅白色のものがそれぞれ1対、小さな金色、赤、黒の錦鯉がそれぞれ2対含まれている。そのほかに、福神漬けや味噌漬けの牛肉もプレゼントとして用意されている。
- (88) 「蒋介石日記」、1967年3月17、18日。「外交-蔣中正接見美方代表談話記録（二十六）」、『蔣経国総統文物』国史館、典藏号：005-010205-00088-003。
- (89) 「蒋介石日記」、1967年「本年総反省録」。
- (90) 「蒋介石日記」、1967年3月28日。
- (91) 「蒋介石日記」、1967年4月22日。
- (92) 「蒋介石日記」、1967年4月22日「上星期反省録」。
- (93) 「款宴日本総理大臣佐藤致詞」（1967年9月8日）、『総統蔣公思想言論総集』巻29、中国国民党中央委員会党史委員会、1984年、55頁。
- (94) 蒋介石は日記の中で書名のみを記載しているため、翻訳者や出版社、出版年などについては不明である。
- (95) 「蒋介石日記」、1967年8月19日「上星期反省録」、8月26日。銭復

『錢復回憶錄卷1 外交風雲動』天下遠見出版、2005年、110頁。

- (96) 「蔣介石日記」、1967年8月25日。
- (97) 前掲、錢復『錢復回憶錄卷1 外交風雲動』、110頁。
- (98) 同上。
- (99) 「蔣介石日記」、1967年10月20日。
- (100) 「蔣介石日記」、1967年9月25日。
- (101) 「蔣介石日記」、1967年11月13日、18日「上星期反省錄」。
- (102) 「島津大使發外務大臣宛電」(1967年12月11日)『中華民國要人本邦訪問關係 蔣經国国防部長關係』外務省外交史料館、分類番号：A'1.6.1.6-2。
- (103) 「蔣介石日記」、1967年「本年總反省錄」。
- (104) 「總統接見日本內閣總理大臣佐藤榮作談話記錄」「外交—蔣中正接見日方代表談話記錄(三)」『蔣經国總統文物』国史館、典藏号：005-010205-00113-001。
- (105) 蔣介石「十九世紀以來亞洲的形勢和我們復國建國的要道」上·下、前掲、『總統蔣公思想言論總集』卷29、71-142頁。
- (106) 同上、86-87頁。
- (107) 同上、87頁。
- (108) 同上、87-91頁。
- (109) 同上、96-97頁。
- (110) 同上、105頁。
- (111) 「蔣經国日記」、1967年12月18日。
- (112) 「蔣介石日記」、1967年1月5日。
- (113) 「蔣介石日記」、1967年12月23日「上星期反省錄」。
- (114) 「蔣介石日記」、「雜錄」1967年2月22日。